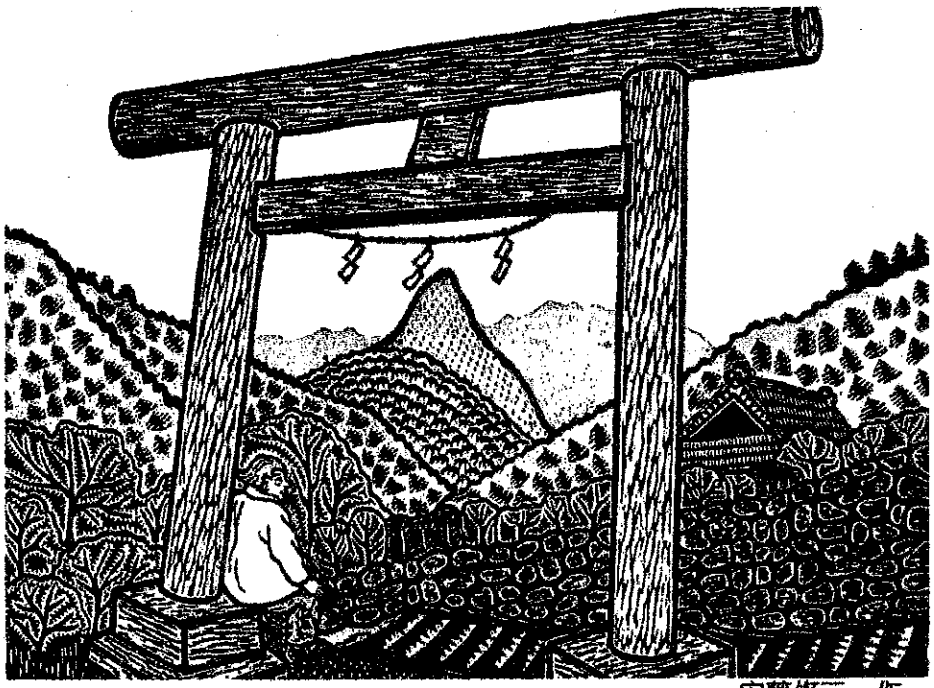
楽しみの世界
奥多摩
《第9号》
平成20年4月15日
奥多摩観光協会



安藤修二　作

名に負へる　天地嶽はも　人知らず
奥多摩槍と　いはば知らまく
川合玉堂

～季節だより～

めぐりめぐって待望の春です。今回は、奥多摩駅の一つ手前、白丸駅周辺を紹介します。

川合玉堂がこよなく愛したふるさと白丸を当観光協会の「白丸散策絵図」を片手にのんびり歩いてみませんか。

玉堂は、終戦の年、白丸に一時疎開し「白丸雑稿」と題して味わい深い和歌や俳句を詠み残しています。

「白丸ゆあふぎ親しみ日数経て
おのが天地とおもふにいたれり」

当時、玉堂の白丸生活は、わが身を置く世界を見出し山水画の中にどっぷりつかった心境だったのかも知れません。いま、私たちが訪れる白丸には、その面影が色濃く残されています。苔むした石垣や石畳の道をはじめ、一木一草に思いを馳せながら心行くまで散策をお楽しみください。

玉堂が住んでいた近くの本栖神社には、伝統ある獅子舞が伝えられていて真夏に荒獅子が踊り狂う姿は圧巻です。戦時中、空襲警報発令中に獅子舞が行われていたことが境内にある玉堂の歌碑から知ることが出来ます。

また、本栖神社の鳥居から見る天地山の姿が印象的です。玉堂は、この山が気に入っていたようで朝に晩に眺め、天地山を奥多摩槍と名付けて親しんでいたということです。

版画右脇の歌は、白丸散策の途上、木製の案内板に刻まれていますのでご覧下さい。

コース途上には、野の花・山の花が豊富で各種のスミレをはじめ、ミヤマキケマン、ウラシマソウなどが目を楽しませてくれます。5月中旬には本栖神社付近にある石垣の間にサボテンの一種「ビャクダン」の真っ赤な花がたくさん咲き、石垣を赤く染め見事です。

元禄時代に開通した数馬の切り通しや大正時代の数馬隧道が白丸の歴史と文化を語ってくれます。

「隧道と隧道の間に春近き
日をいっぱいに浴びてゐる村や」

白丸は日当たりのよい所です。春を待ちわびる玉堂の気持ちが伝わってきます。　（岡崎　学）

～新企画紹介～

御岳山奥の院のシロヤシオ

御嶽神社階段下を左に折れ、長尾平を左に見て奥の院方向へと向かいます。天狗の腰掛杉から道を右にとり山頂にむけて急な坂を登っていくと、岩と岩の間に咲くシロヤシオの白い花が見られます。奥多摩では川苔山周辺をはじめ、主に乾燥する尾根で育つこのシロヤシオは、5月の中旬頃に、その清楚な花を咲かせます。

山頂から西に向かうと鍋割山頂に着きます。春には山頂の北斜面にカタクリの花が結構咲いていました。標識からは踏み跡程度の小道を北に向けて下って行きます。大楢峠へ向かう尾根筋を道幅は狭いがジグザグの歩き易い道です。しばらく進むと、展望が大きく開けるススキの道となり、大塚山、城山、本仁田山がよく見えます。休めるような広場はありませんが、人も少なく眺めを楽しみながらのんびり下って行きますと、植林帯に入り、ストンと下る感じで大楢峠に着きます。

（永崎信子）

巨樹と日原鍾乳洞

奥多摩にも春がきます。そして夏もすぐきます。

日原方面の夏の景色が私は大好き！一石山神社の樹々の緑のシャワー、車道斜面のイワタバコのピンクの花、鍾乳洞の冷気など、夏の味わいを感じられるからです。日原の巨樹、倉沢のヒノキ、水垂れのトチノキなどに会えます。

森林館周辺の風景は、なつかしさと活力（まちがいなく明日の命を）を与えてくれると、私は感じます。

日原を訪ねるたびに樹々への愛しさ、優しさ、たくましさに感謝しつつ散策します。

是非、日原の樹々に会いに来さっせぇ！まずは奥多摩駅まで、そして路線バスにて日原鍾乳洞にお出かけください。

（花井いつ美）

三頭山から山のふるさと村へ

都民の森の入口から北に進み、左の木の階段を登りきって左に道をとり、30分程で三頭の大滝に着く。滝の落ち込み部を左に見ながら橋を渡り、右の沢沿いの道に入る。右岸を歩き左岸に渡ると休憩所に着く。

ここから北に登っていく。ムシカリ峠は展望がきかない。峠より右に道をとり、ゆるい坂を行く。木の階段が出てくると頂上は近い。

頂上からは東に向かって下り、10分程で東峰の登り口、ここを左に見て山腹を進むうちに、時々アップダウンを繰り返し、すこし登りになって休憩小屋に着く。

ここからしばらく歩くと、崖のような急坂になる。この下が鞘口峠だ。10分程だが滑りやすい。

峠から北にジグザグ道を下り、水の流れる所を過ぎると、道が落ち着いてくる。木橋を10箇所位渡って周遊道路を渡ると、山のふるさと村への道に入る。

すこし下ると、右下に沢水が見える。下りきって沢を渡ると山のふるさと村の北の端にとりつく。そのまま通り抜けて湖面が見えて来たら左の道に入り、浮橋に向かう。ゆれる橋を渡り階段を登るとバス停はすぐそこだ。

（杉浦重明）

浮橋を渡って虫探し

奥多摩駅から乗ったバスを、小河内神社前で降りますと、眼前の奥多摩湖の湖面に、美しいひとすじの人工物が見えてきます。麦山の浮橋です。

浮橋を渡り始めると、夏の日射しにほてった頬に湖面の涼風が心地よく、5分も歩いたかなと思ったときには、対岸の緑陰へと足を踏み入れています。

湖面の輝きを樹間に垣間見ながら、平坦な遊歩道を歩くと、やがて都立自然公園・山のふるさと村に着きます。湖畔に広がる美しい自然林と清涼な沢の水に恵まれた公園です。そこで子ども達には沢に住むかわいらしい虫たちを探してもらい、大人の皆さん方には、樹木や野草のご案内もいたします。

子ども達には、夏休みの楽しい思い出のひとつになること請け合いですし、大人の皆さん方にも、ふところの深い奥多摩での夏の爽やかなひとときを楽しんでいただけると思います。心からお待ちしております。

（橋上一彦）

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その7 ～

春を待ちきれなかった人

今年は地球温暖化の影響もあり、暖冬という長期予報が出されたようだったが、奥多摩では年明けから寒い日が続いた。そして雪も1月、2月と何度か降り、2月3日の青梅マラソンも降雪のため中止を余儀なくされた。3月初めになっても風花の舞う日があり、吉野梅郷の梅の花もかなり遅れている。

1月14日、都内S区在住の男性Kさん(63歳)が昨日「奥多摩の山に行く」と奥さんに言い置いて、午前6時に自宅を出たまま夜になっても戻らず、奥さんは本日午前3時に居住地であるO警察署に捜索願を出した。

O警察署は、行方不明者が携帯電話を所持していることから、電話会社に位置測定を依頼したところ、奥多摩町大沢集落に立っているアンテナが微弱電波を拾っていることが判明したといい、青梅警察署に捜索を依頼してきた。

山岳救助隊を招集し、集まった救助隊員を3個班に分け、大沢集落を中心とする山域の捜索に当たることにした。行方不明者の携帯電話の電池はすでに切れてしまっているが、大沢集落にあるアンテナの北側、蕎麦粒山から派生する鳥屋戸尾根。東側の安寺沢から平石山、本仁田山。南側の石尾根、西側の狩倉山から派生する山ノ神尾根に捜索隊を投入した。石尾根以外はいずれも、登山地図に赤色実線で記載のある登山道ではなく、近頃人気が出てきた、いわゆるバリエーションルートだ。

私は昨年赴任したばかりの森山岳救助隊長と石尾根を狩倉山まで登り、山ノ神尾根を捜索することにした。

石尾根は三ノ木戸山から上には雪が残っていた。狩倉山から山ノ神尾根を少し下ったが、雪に踏み跡はなかった。狩倉山まで登り返し六ツ石山まで行き、トウノクボ経由で水根に下山した。石尾根に転落するような場所はないし、雪に踏み跡があるから道に迷うこともないと思われる。午後4時奥多摩交番に戻った。本仁田山と鳥屋戸尾根の2個班も帰ってきたが、何の手掛かりも得られなかった。

翌15日は11名体制で平石山、本仁田山、川苔山を中心に捜索した。警視庁航空隊のヘリも飛ばし、空からの捜索も行ったがやはり発見することができなかった。

16日も朝、山岳救助隊員は奥多摩交番に集結した。行方不明者Kさんの奥さんが本人の写真を持って交番を訪れたので、Kさんについて話しを聞くことができた。

Kさんは若いときに山をやっていたが、昨年の10月、奥多摩の高水三山を登ったことで山熱が再燃し、それから毎週のように奥多摩の山を登るようになった。最近では奥多摩に別荘を買いたいと、物件を探し歩いてもいたという。

奥さんはKさんのパソコンに入っていた山のデータを引き出して持参した。それには青梅線の電車の時刻と、終点奥多摩から乗り継ぎのバスの時間。今までに登った山名とコースタイム。これから春になったら登ろうとしている山のことなどが詳細に書かれてあった。そしてこれから登ろうとしている山のトップに蕎麦粒山が書いてある。コースは日原からヨコスズ尾根を一杯水避難小屋に登り、蕎麦粒山頂に立って、鳥屋戸尾根の笙の岩山を経由して川苔橋に下山するルートである。「これだ」と私は思った。大沢集落のアンテナから見て、その北側正面に位置する鳥屋戸尾根は以前、登山地図に登山道の表記がなかった。しかし今、昭文社の最新登山地図には、赤色破線ではあるが登山道の表記が書き込まれている。ここ数年鳥屋戸尾根を登る登山者が多くなり、道迷いや転落死亡事故なども発生している。

山を想う気持ちは恋心に似ている。「山恋」である。私も山に熱中し出したころは、1日として山を想わない日はなかった。山のことで頭が一杯になり、胸が熱くなるのである。

愛しい恋人がそこにいるのに、春が来るまで会わずに待つことができようか。山熱に侵された登山者が、春まで待てるはずがない。Kさんも、はやる気持ちを抑え切れず、冬の蕎麦粒山を目指したのではないだろうか。

「どうしたらいいのかわからない」というKさんの奥さんに「私たちも一生懸命探すので、自宅に帰って待っていてください」と諭し、この日も3個班に分かれ、各仕事道から蕎麦粒山に登り、迷い込みやすい笙の岩山下部の東側ルンゼを丹念に探した。航空隊ヘリも午前と午後に出て、鳥屋戸尾根を空から探したが、やはり何の手掛かりも得ることはできなかった。

翌日も、その翌日も救助隊員は鳥屋戸尾根に突き上げる支尾根、沢などに入り、航空隊ヘリ、警備犬などの応援も得て捜索を続けたが、Kさんを発見することはできなかった。

1月18日夕方、Kさんが行方不明になって6日が経った。雪も降り、生存の可能性も低い。残された家族のことを考えると気の毒でならないが、このまま部隊を投入し、発見になるまで捜索を続けることはできない。山岳救助隊としては屈辱的な選択ではあるが家族の了解を得て、一旦大掛かりな捜索は打ち切り、この後は人的余裕があったら、その都度救助隊を編成し、まだ見ていないところを探すこととした。

翌日、Kさんの奥さんが手みやげを持って、捜索のお礼に交番を訪れた。慰めの言葉もないが、警察側の事情もよく説明し、これからも人を出せる時は優先して捜索にあたること。今までにも猟師や釣り人などの情報から発見された例もあること。何か情報が入り次第に再捜索をする旨を話して奥さんの了解を得た。

2月に入っても何度か雪が降った。Kさんの奥さんは度々交番を訪れ、その後の情報を聞きに来た。2月14日バレンタインデー。その日は救助隊員にチョコレートを持ってきてくれた。そして雪で白くなっている山を見て、肩を落として帰って行った。若い隊員はチョコレートを食べながら、チョコのお返しに何とかホワイトデーまでにKさんを探し出し、奥さんのもとに返してやりたいと話していた。

3月3日、休みで自宅にいると、森山岳救助隊長から電話があった。昨日都内K市在住のMさんという59歳の男性が、倉沢へ滝の写真を撮りに行ったまま戻らないと捜索願が出されたというものであった。

雪の残る沢の中に入って滝の写真を撮影するのは、転落などの危険が伴う。「ちょっとヤバイな」と思いつつ、私は愛車ハリアーを駆って奥多摩に向かった。

交番に着いたら、森救助隊長以下5名がすでに倉沢に入って捜索をしているという。私も支度をして倉沢に向かい、魚留橋のところで先発隊と合流した。倉沢は魚留橋上流で塩地谷と長尾谷の二つに分かれる。

Mさんはインターネットで滝の情報を得て倉沢に入ったというから、倉沢で大きな滝は塩地谷の地蔵の滝くらいしかない。午後からはその地蔵滝を探すことにして遅い昼食をとった。

地蔵の滝には、崩れた林道に架かる地蔵橋から入り、岩場を慎重に下の塩地谷に降りる。相当に山慣れしていないと、この沢を下ることは無理だろう。塩地谷には何メートルもある大きな石がゴロゴロしている。その間を縫って上流に200メートルほど登り詰めると、高さ15メートルほどの地蔵の滝が現れる。滝壺には雪が多く残っており、人が落ちたような跡もない。

今日中に探し切れないとなると、行方不明者を2人も抱えることになる。何とか探し出そうと、ここで塩地谷と長尾谷の2個班に分け、それぞれ上流を目指した。私は渡辺隊員、大塚隊員と3人で長尾谷を行くことにした。

凍り付いた沢沿いの仕事道を登っていくと、途中で道は長尾谷を離れ棒杭尾根（地元では古ボングイという）沿いに稜線まで付いている。

先に棒杭尾根の末端まで行った渡辺隊員が、大声で手招きしている。急いで登っていくとそこに、体中泥だらけで座りこんでいる登山者と、傍らに釣り師と思われる男性が立っていた。座り込んでいる登山者が行方不明になっているMさんだという。比較的元気そうに経緯を話した。

Mさんは昨日、長尾谷を稜線まで詰めようと登って行ったが、二股周辺で転落し右足を骨折してしまった。何とか下山を試みるも思うに任せず途中でビバーグ。そして今日も尻をついてズリながら下降を続けた。そこへ1時間ほど前、運よく渓流釣りに登ってきたTさんと会い、手を貸してもらってここまで下ってきたものであった。右下腿は折れて腫れ上がり、とても歩ける状況でない。塩地谷の班にMさんを発見した旨の無線連絡をし、ヘリの要請をした。しかし辺りが暗くなり、空一面に激しく雪が舞い出した。冬将軍の最後の抵抗であろうか、ヘリコプターの出動は望めそうにない。

80キロ近くあるMさんだが、気はしっかりしているので背負って運ぶしかあるまい。空にしたザックと合羽を組み合わせ簡易背負子を作り、渡辺隊員が背負う。後ろからテープスリングで確保しながら、重いのでゆっくりゆっくり運ぶ。下の班と合流し、背負い手を山内小隊長と交代した。沢の中は凍っているのでアイスバイルで氷を砕き、足場を作りながら行く。途中で私が交代して背負った。重い。60キロで60歳の私が、59歳、80キロの負傷者を背負う。ヨタヨタしながら背負う姿を考えたらおかしくなった。それでも3人で交代しながら沢の中を500メートルほど運んで、暗くなる前に林道まで降ろすことができた。駆けつけた消防隊に引き継ぎ、担架で救急車まで搬送し救助活動を終えた。「今日発見にならなければ危なかったな」と胸をなでおろした。

（青梅警察署山岳救助隊副隊長　金（こん）　邦夫）

奥多摩昔語り

奥多摩の地名（9）

海沢は、「うなざわ」と称し、JR青梅線奥多摩駅と白丸駅の中間あたり、多摩川の右岸一帯の地籍です。とば口の神庭（かにわ）の集落を過ぎると、上野（うえの）、中野（なかの）、下野（しもの）などの集落が、海沢川に囲まれるようにして段丘上に寄り集まっています。海沢の語源は、地域を取巻く山や沢が曲がりくねって、うねうねとしている様子、畝沢（うねさわ）が、うなざわに転化したという説があります。また、向雲寺の前に広がる中野から下野辺りは、昔、一面の池沼（湖）になっていたといわれ、山地では、池沼（湖）のことを海（うな）に擬（なぞら）えていうこともあり、周囲の沢と結びつけて、海沢の地名になったともいわれています。

「昔、海沢には、大きな湖（池沼）があり、そこには湖の主の龍が棲んでいました。ある時、この龍が湖底の棲処（すみか）をゆるがしながら出てきて、天に昇って行きました。このときの大揺れのために、山が決壊して湖の水が流れ出てしまい、干上がった後には、溝川が残るだけとなりました。それからどれだけ永い年月が経ったか分からない頃、天に昇った龍は、昔の棲処が懐かしくなり、昔あった湖の横にある山に降り立つと長々と体を伸ばして、そのまま動かなくなり、ついには、岩と化してしまいました。」こんな昔話が残されていますが、奥多摩町誌などにも、向雲寺の後の神路山と海沢神社のある和田山は、かつて一帯の山続きとなっていて、前面には、大きな池沼があったが、いつの頃か決壊して、現在のすり鉢状の地形になったと書いてあります。

そして、湖の決壊したところを「さけど（裂所）」、泥流水が押しつけられたところを「いつけ（一付）」といい、蛇穴（じゃーな、ざーな）と呼ばれる湧水地があり、そこが、湖の主の棲処だったという言い伝えがあります。

向雲寺の山号としている龍岩山は、天から帰ってきた龍が岩と化して出来た山の意で、裏山の神路山を指しています。　（岡部義重）

資料：奥多摩町誌、奥多摩町広報

山の花だより

巨樹に咲く花

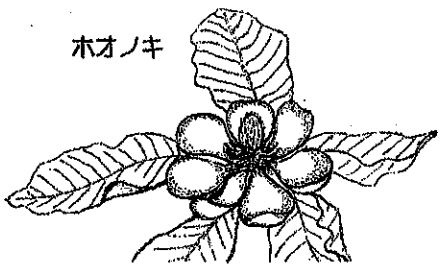
環境省が定めた巨樹の条件は、地上高1m30cmの幹周りが3mを超える固体とされています。奥多摩で、この条件をクリアし巨樹と認定されている樹種をあげると、トチノキ、シオジ、カツラ、そしてミズナラでしょうか。まれに、ブナやイチイそしてコナラなどが大きく育つことがありますが、あまり多くは見られません。

この巨樹に列挙される樹種のうち、トチノキとカツラ以外では、なかなか花を観察することはできません。もちろん花は咲くのですが、その色合いや大きさなどから花と実感できないからでしょう。トチノキは、西洋のマロニエに似た美しい小さな花を円錐状につけます。また、カツラは、他の樹木の葉が開き始める前に咲くためか、雄株において赤い花がよく目立ちます。花そのものは、フサザクラに似ていて、決して美しいとは言えませんが、その色合いと密集して咲く様子が見事です。

背丈の低いかん木や草などは、簡単にその花を楽しむことができますが、巨樹のみならず、樹高が10mを超えるような樹木では、その花を観察することはなかなかできません。ちょうど橋の下か、崖っぷちを通る車道の谷側に生える樹木ではそれも可能ですが、車窓に流れていく景色の中で、樹木の花を楽しむのは難しいようです。

車の往来に注意しながら、崖っぷちを走る車道を歩くと視界が広く取れ、四季折々にいろいろな発見があります。春先の高木の枝先に咲く花の観察や冬季の冬芽の観察にも格好な条件を備えています。

そんな場所でもっとも目を引く樹木の花といえば、それはホオノキ（左図）でしょう。直径が20センチほどもある白い花弁を持った花が、天に向かい思いっきり開く様は、とても見事です。


ホオノキ

（堀越弘司）

ガイドだより　～私の一名山・ウトウの頭～

私がウトウの頭の名前を知ったのはガイドの会の女性 N さんが道に迷いウトウの頭に出て大変な思いをした話を聞いた時からです。どんな山なのか興味がわき調べてみました。

文献では、「由来は水鳥 "ウトウ" の嘴の突起物に似ているからである。またウトウとはウミスズメ科の鳥であり、北日本の島で繁殖し付近の海上に住み、冬は少し南下する。黒褐色で頭から胸部までは白く、夏には嘴が橙色になり基部に黄白色の突起物が出て、顔にも白い２本の飾り羽がでる。」

鳥の名前にも魅かれ、調べれば調べるほど登ってみたくなりました。

「ウトウの頭（1587.9m）は日原の一石山神社から登り、タワ尾根の上部に位置し一石山（1070m）、人形山（1176m）、金袋山（1325m）、スズ坂の丸（1456m）などを連ねる長い尾根にある山」とあります。

3 年後にチャンスが訪れました。奥多摩駅からバスに乗り日原鍾乳洞に向かいます。小川橋を右折し、しばらくすると一石山神社に着きそこが登山口です。

はじめは急登で所々崩落した場所もあり、緊張の連続でしたが一石山を過ぎるころから少し緩やかになり、しばらくすると尾根上に出ます。

人形山へは尾根歩きとなり、はっきりした踏み跡はないので尾根上の真ん中を歩くように注意しながら、赤い布標識を頼りに進んでいくと、人形山の小さな標識が出てきます。

この辺りからスズタケが多くなり、その中を踏み分けて登ります。倒木も沢山あるので踏み跡を見つけるのに立ち止まることが多くなり、注意深く進んでいくと金袋山と書かれた木片が木立の先に見られます。

そこからスズ坂の丸まで進むとスズタケは少なくなり、足を取られることもなくなります。短い急登をいくつか登ると平らな尾根の肩に出ます。

さらに下降と登りを数回繰り返して、ウトウの頭に到着です。登山口から 3 時間 30 分かかった頂上ではウトウの姿が彫られた額が迎えてくれました。

思ったより狭く見晴らしもない薄暗い頂上でした。山の名の由来の突起部分ははっきりわかりませんでしたが念願がかなった嬉しさで充実した山行になりました。

この山への登山道は整備されていません。危険が伴うと思われますのでベテランの方々と一緒にいくようにしてください。　（中里興志江）

施　設　案　内

☆ そば打ち体験道場　『とちより亭』

＊ 営業日　金・土・日・月曜日

午前 10 時、11 時 30 分、午後 1 時が体験開始時間です。体験は予約が必要です

＊ お申込み・お問合せ　0428-83-8666

御前山の麓　（奥多摩町 境 ６６０）

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、春から夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（２名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。　（抽選の場合あり）

① 5月 15 日(木)　新緑の海沢の滝めぐり
　応募締切日　4月 25 日　（登山）

② 5月 19 日(月)　シロヤシオを訪ねる ソバツブ山
　応募締切日　4月 25 日　（登山健脚）

③ 5月 27 日(火)　新緑の奥多摩湖いこいの路
　応募締切日　5月 8 日　（ハイキング）

④ 6月 10 日(火)　三頭山から山のふるさと村へ
　応募締切日　5月 25 日　（登山）

⑤ 6月 12 日(木)　エゾハルゼミを訪ねる倉戸山
　応募締切日　5月 25 日　（登山）

⑥ 6月 20 日(金)　大塚山のコアジサイを訪ねる
　応募締切日　6月 6 日　（登山）

⑦ 7月 11 日(金)　金袋山の巨樹を訪ねる
　応募締切日　6月 25 日　（登山健脚）

⑧ 7月 23 日(水)　巨樹と日原鍾乳洞を訪ねる
　応募締切日　7月 10 日　（登山）

＊ 募集人員：各回 30 名、参加費：500 円

次号は、平成 20 年 7 月 15 日に発行します。

発行：奥多摩観光協会
住所 〒 198-0212　奥多摩町　氷川　210
電話 0428-83-2152　Fax 0428-83-2789
編集：名人・達人観光ガイドの会